

第 11 回「学ぶとは何か（一）」

民の生活。

指導者の条件。

講義

加地伸行

「論語指導士」養成講座 第 11 回講義

論語教育普及機構 代表 加地伸行

今回は「学ぶとは何か」というテーマの第一回です。

孔子は自分で学校を作って、学生を集めておりました。そこでは学ぶということが中心でした。では、この孔子の学校での「学ぶ」とはどのような内容であったのか、どういうことであったのかということについてお話しします。

その前に、前回お話ししましたことを少し振り返ってみます。

世の中は「士・農・工・商」という四つの職業に大体分けられると言いました。その場合、「農・工・商」は、その家での仕事を真似していけばいい。農業ならば農業の、春から冬の仕事を順番に学んでいけばいい。工業、商業もそれぞれの手順を見習っていけば、大体覚えられるでしょう。

ところが「他者の幸せのために」という気持ちで、世に出ようとした人たち、官僚、政治家というのは、そういった決まったものはありませんでした。それで孔子の学校のような養成所で学ぶことになります。

そこで学ぶとは、何を学ぶのか、ということが大きなテーマとなります。『論語』の中には、「何を学べばいいのか」という話が数々出てきます。

みなさん不思議にお思いでしょう。「学ぶ」もの、そんなこと決まっているじゃないか。いろいろ重要な知識を学んでいけばいいんだと、普通そう思いますね。確かにそれはそれで正しい。ところがそれだけではだめだ、というのが孔子の考え方です。

それでは初めに戻りまして、「知識を学ぶ」というところからいきましょう。

【知識を学ぶ】

「知識を学ぶ」というのは、「学ぶ」ということでは、一番入りやすい内容です。

文字を覚えるとか、文章を書くとか、儀式における身体の動かし方、というようなことです。

しかしそれらはそういうことを教えるところに行けば、学ぶことができます。ですから、人間は「学ぶ」イコール「知識を得る」という方向に行きがちです。今日でもそうです。小学校から始まって、それぞれの段階の学校において、「学ぶ」のほとんどが知識を得ることで占められています。

ここに問題があります。

孔子の言う、民の仕事、農業、商業、工業には、特別な知識は必要がなかった。

しかし今日の学校教育では、何が何でも様々な知識を詰め込みます。生徒の私もそうでした。

しかし、その大半は、ほとんど忘れていきます。すると、人は言います。

知らないのと、忘れたのでは違うんだと。嘘です。同じです。

小学校以後、知識をどんどんどんどん詰め込むというのが学校の風景です。

けれども、学校での知識を十分に理解し、使うことができる人が何割いるのでしょうか。

全員は無理です。この無理なことを学校はしています。

これはおかしい。必要のないことまで、知識として詰め込んでいるのですから、いやになるのは当たり前です。

いやになればどうするか、さぼります。雑談をします。出歩きます。学校に行かなくなります。

このようなことが日本、全国で行われているでしょう。

【知識より尊いもの】

私は、知識が最も大事なものというのはおかしいと思います。

仮に、難しい数学がわからない、難しい理科はわからない、けれども、働いて帰ってきた親御さんに対して、肩を叩いて、疲れを癒そうとする子がいるとしたら、素晴らしいことではありませんか。端々の知識を覚えるよりも、親御さんの疲れた体を癒そうという気持ちと行い。あるいは掃除を手伝う子、やさしい子。こういうことが大事ではないでしょうか。

しかしわが国では、このようなやさしい行動、ことば、気遣い、配慮に対して、高く評価するようには見えない。ここに問題があります。

孔子はそれを言っています。

知識、これはある程度のものは必要である。しかし、そこに安住してはならない。

では、何が必要でしょう。知識に加えて、道徳的な、修養的な、そういうものを持っていることが大事であると、孔子は絶えず言います。

孔子の学校には、全国から、いわゆる秀才が集まってきました。なぜなら、孔子の学校で、ある程度のかをつけると就職できたからです。各地で行政担当ができる人材を求めていましたので、孔子が推薦します。孔子の推薦状を持って、就職した弟子はたくさんいます。するとますます若い人々が集まってきます。孔子にいきなり、早く就職の面倒を見てください、と言ってくる人もいました。『論語』に書かれています。そのとき、孔子は諭しました。

お前に足りないのは、道徳的なところなんだ、それをしっかり身に付けたなら、お前がバタバタしなくても、簡単に就職できるんだと、そういう場面もあります。

【「士」への道】

ところで、孔子は二つの道を教えました。

まず知識は必要だ。これは認めています。

なぜなら、政事を担当したら、数字が分からなければ務まりません。担当地域の農業の生産量はいくらで、どれくらいを税金として取ることができるか、そういう数字がわからなかったら、政事はできません。数字に明るくなければなりません。

それから文章が書けなくてはなりません。こういうことをする、という文書をあちらこちらに出さなくてはいけませんから。文章を書くには文字を知らなくてはならない。基本的な力です。

知識は当然必要です。

しかし、それだけではだめだと言うのが孔子です。人間的な気持ちを写し出していく、道徳的な性格を養っていくべきであると言っています。

それを「徳性^{とくせい}」としておきましょう。これを涵養^{かんよう}（無理せずゆっくりと養う）しなさい、高めていきなさい。いかに知識があっても、徳性の無い人間には誰もついていかない。こういうことを言っています。

これは今日のことばで表すと「指導者の条件」「リーダーの条件」ということでしょうかね。

具体的な話をします。

それは島田 勲^{しまだ あきら}という方の話です。今から70年前、戦前の沖縄県の最後の知事になった方です。（当時は、選挙で選ぶのではなく、内務省の役人が知事になりました。内務省はもうなくなりましたが、かつては内政を担当する重要な省庁でした。）

島田さんは、昭和20年1月、沖縄に赴任しました。前年の12月に、そのときの知事が逃げてしまいました。無責任な男です。沖縄へのアメリカ軍上陸がほぼ確実とわかったからです。

しかし、県知事がいなくては、まとまりませんから、県知事を求めました。けれども誰も行くとしなかった。そこへ島田 勲さんに話が入りました。

当時、島田さんは大阪府の内政部長。彼は引き受けました。そのときのことばが有名です。

「俺が行かなければ、誰かに死ねということになるじゃないか」

その時点では、沖縄県知事になることは、死を覚悟しての就任です。自分がことわったら、誰かに回る。それは、その誰かに死ねということになる。では、私が引き受けよう、と。

島田さんは昭和20年1月に沖縄県知事として赴任。赴任後、台湾などを訪れて食料を調達し、沖縄にもたらしました。沖縄の人達は、この最後の知事、島田 勲さんを大変尊敬しています。

そしてアメリカ軍の上陸。日本軍は敗走を重ね、南の摩文仁^{まぶん}の丘にまで、軍が動いてきます。島田 勲さんはある時点で、沖縄県庁の職員を集めてこう言いました。

「本日をもって、沖縄県は解体する」。だから、君達はもうついてくる必要はない。そう厳しく申し渡して、家に帰らせました。そして島田さんと警察部長とが、ふたりで摩文仁の丘に向かい、そこで最期を迎えられました。

沖縄には島田 叡さんの慰霊塔が立っております。隣には亡くなられた職員の方達の名が刻まれた碑が立っています。

この島田 叡さんは県知事、官僚です。しかし、単なる官僚ではなかった。自ら最後を引き受けるという覚悟を持って、全身全霊で沖縄のために働いた。そしてアメリカ軍の砲撃の中で亡くなられた。私は立派だと思います。

こういう生き方を、孔子は望んでいたのでしょうか。単なる「知識」持ちではなく、「徳性」を持った人間でなければ、本当の政治家、為政者、官僚にはなれない。

島田さんが沖縄県知事をことわっていたなら、ごく普通の幸せな一生を送ることができたでしょう。しかしあえてそれを捨てて、自ら沖縄に赴任した。この在り方を我々は忘れてはならないと思います。

これが、孔子が言っている「学ぶ」ということの根本です。

今回は「学ぶとは何か」の第一回のお話をしました。